平成 26 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科　修士論文

大学生競技者の競技意欲と ソーシャルスキルおよび 指導者からのサポート認知との関連

所属系　スポーツ科学系

氏　名　田口　雄助

論文指導教員　佐久間　和彦

合格年月日　平成 27 年 2 月 23 日

論文審査員　主査 広沢正孝

副査 島内憲夫

副査 佐久間和彦

第１章　緒言……1
第２章　文献考証……3
第１節　動機づけ理論……3
(1)概要……3
(2)動機づけ理論の分類……4
第２節　達成動機……5
(1)概要……5
(2)スポーツと達成動機……6
(3)スポーツ場面における達成動機の測定……6
第３節　ソーシャルスキル研究……7
(1)ソーシャルスキル研究の概要……7
(2)スポーツとソーシャルスキル……8
第４節　ソーシャルサポート研究……8
(1)ソーシャルサポート研究の概要……8
(2)スポーツとソーシャルサポート……10
(3)スポーツにおけるソーシャルサポートの測定……11
第５節　指導者と競技者の関係……10
第３章　研究目的……13
第４章　研究方法……14
第１節　調査方法……14
第２節　調査期間……14
第３節　質問紙の構成……15
(1)　対象者の属性……14

(2)　Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版（KISS-18）..... 14

(3)　Athletic Social Support Scales (ASSS)..... 14

(4)　達成動機尺度..... 15

第 4 節　分析方法..... 15

(1)　属性別による各尺度得点の比較..... 15

(2)　KISS-18、ASSS、達成動機尺度の相関分析..... 15

(3)　KISS-18 および ASSS が達成動機に及ぼす影響..... 16

(4)　対象者の分類..... 15

第 5 節　データ処理..... 16

第 6 節　倫理的配慮..... 17

第 5 章　結果..... 17

第 1 節　属性別による各尺度得点の比較（t 検定および分散分析）..... 17

(1) 属性別による KISS-18 得点の比較..... 17

(2) 属性別による ASSS 得点の比較..... 18

(3) 属性別による達成動機得点の比較..... 19

第 2 節　KISS-18、ASSS および達成動機における相関（相関分析）..... 20

(1) KISS-18、ASSS および達成動機得点の相関..... 19

(2) KISS-18 と達成動機得点の相関..... 19

(3) ASSS と達成動機得点の相関..... 20

(4) KISS-18 と ASSS 得点の相関..... 21

第 3 節　KISS-18 および ASSS が達成動機に及ぼす影響..... 22

第 6 章　考察..... 23

第１節　属性別でみたソーシャルスキル、指導者からのサポートおよび競技意欲の現状 23
(1)性差について 23
(2) レギュラー・非レギュラーの差について 23
第２節　ソーシャルスキル、指導サポートおよび競技意欲の関連 24
第３節　KISS-18 および ASSS が達成動機に及ぼす影響 25
第４節　今後の課題 25
第７章　結論 27
要約
引用文献
英文要約
謝辞
表・資料

第1章　緒言

スポーツは一般的に健康に良いものと考えられている一方で、スポーツ選手における心身の健康問題は幅広い年代に見受けられている[63]。特に大学生競技者においては、プロスポーツや企業スポーツと比較して周囲の健康管理体制が整っていないこと、競技者自身の心身の健康管理に対する認識が低いことも重なることで[85]、彼らを取り巻く様々なストレスが身体的および精神的疲弊をもたらすことが報告されている。とりわけ、競技成績の低迷、学業と競技生活の両立、指導者との関係などから、心理的問題を抱えている大学生競技者は多いといえよう。さらに、近年の競技スポーツ化に伴うトレーニングの低年齢化、長時間の練習、勝利志向の重視によって、競技者に対して競技そのものが強いストレスになっているのが現状である[36]。これらの問題は、深刻化するとアスリートバーンアウトやうつ病など深刻な精神疾患を引き起こす可能性があるため看過できないといえる。近年の研究では、これらの問題に対し包括的に対処するため、ソーシャルスキルとソーシャルサポートの有効性が注目されている[47]。

ソーシャルスキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役だつスキル」[34]と定義され、具体的には、会話の仕方、主張の仕方など社会的場面において能力を示すものである。松野ら[40]は、ソーシャルスキル欠如は人間関係悪化や、問題行動の発生の一要因になり得ることを報告している。さらに、種ケ嶋[81]は、陸上競技選手を対象に、ソーシャルスキルとバーンアウト及び完全主義との関連について検討した研究の中で、バーンアウト傾向が低い選手は、ソーシャルスキルも高いことを報告している。

また、競技者に対するソーシャルサポートは、「競技者が競技生活を円滑にすすめるために必要となる他者との関わり」[83]とされており、競技者自身がソーシャルサポートを享受することにより、競技場面におけるストレスを緩和することができ、さらにはバーンアウトの抑制に効果的であることが報告されている。

よって、大学生競技者の心理学的諸問題の解決には、彼らが高いソーシャルスキルを獲得し、コーチやチームメイトからの共感的な理解や援助といったソーシャルサポート体制を得ることが重要といえよう。しかしながら、これまでの競技場面におけるソーシャルスキルおよびソーシャルサポートに関する研究では、人間関係問題や学生と競技者という役割葛藤、バーンアウトとの関連を検討した研究が多く、競技意欲との関連については未だなされていない。

競技意欲は、競技力の低下や、競技そのものからのドロップアウトの一要因と考えられ、競技意欲の減退は避けなければならないといえよう。大学生競技者のようなアマチュアスポーツにおいては、活動目的そのものが指導者からの影響によって左右されることが多い[79]。従って、指導者のサポートを享受できなければ、競技意欲を減退させる大きな誘因になることが考えられる。また、競技者にとって心理学的要因が競技力の向上や競技成績に非常に貢献していることが広く知られており、これまで動機づけや目標志向性、自己の有能さなどを測定し、競技力が高い人ほど、これらの能力が高いという結果が多く示されてきた。 McClleland[45]によれば、達成動機の高い人は低い人よりも競技力に差が出ることを報告している。

これらのことから、指導者からのサポートの享受には個人差が存在し、意欲向上、または減退に影響していると推察される。しかしながら、その要因については未だ不鮮明である。そこで、競技者と指導者との関係性という側面から、ソーシャルスキルおよび指導者のサポートが競技意欲とどのように関連しているのかを検討することとした。

第２章　文献考証

第１節　動機づけ理論

(1)概要

動機づけとは、行動の理由を説明する概念であり、「行動を一定の方向に向けて生起させ、持続させる過程や機能の全般をさす」と定義されている[55]。つまり、動機づけには、行動を始発する機能、一定の目標に行動を導く機能、行動を強化する機能があると考えられる。

動機づけ研究の変遷を概観すると、初期の動機づけに関する理論は、人間の行動は本能と呼ばれる生得的に与えられた動機づけによって引き起こされるという立場に立つ精神分析学者のフロイトが提唱した動機づけの本能論に端を発する。その後、本能論の考え方を色濃く残しながらも、ハルの動因低減説に代表されるような行動生起の生理学過程に注目した生理学的動機づけ理論が中心になってくる。この理論は行動の発現における生得的な要因の影響を重視する点では本能論と大差はないが、生理学的過程に注目することによって本能論では言及されなかった行動発現のメカニズムに関して考察しようとする立場である。そして、近年では生得的ないし生理学的な過程とは独立して、人間の認知機能が行動を発現させる原因になるという立場に立つ認知的動機づけ理論が注目されるようになってきている。

磯貝[31]によれば、初期の動機づけに関する理論は生得的、生体内発生的な内部要因に重点を置く理論、換言すると、機械的な人間観に基づく理論が中心であった。そして、次第に、習得的、生体外発生的、方向付け的な要因に重点を置く理論、すなわち、社会的な存在としての人間に焦点を当てた理論へと移行してきているとしている。つまり、近年の動機づけ研究では、従来の本能や生理学的な過程を重視する理論ではなく、人間の認知的な機能を重視した理論が構築されるようになってきたのである。

(2)動機づけ理論の分類

スポーツ場面での動機づけに関する諸理論の位置づけや関連性を明確にするため、動機づけ理論の分類を行う。これにより、本研究の位置づけが明確にできるものと考える。

奈須[56]によれば、動機づけを説明する理論は「動機理論志向」、「期待一価値理論志向」、

「目標理論志向」の三つに大別できるとされている。

初めに、「動機理論志向」とは、ある動機の有無と水準によって行動が決定されるとすることである[56]。つまり、動機づけが存在するのかどうか、あるいは動機づけの水準の高低が行動に影響を及ぼすと考える理論である。例えば、達成動機づけ理論であれば達成動機の水準がどの程度強いのか、内発的動機づけ理論であれば、自己有能感と自己決定感の水準で行動が決定するとされている。

続いて、「期待一価値理論志向」とは、刺激の認知的処理の結果形成される期待と価値のいずれか、あるいは両方の水準によって行動が決定されるとすることである[56]。つまり、ある方向に行動しようとする傾向の強さは、その行動によって一定の結果が得られるという期待の強さと、個人が結果に対して持つ価値の強さが行動に影響を及ぼすと考える理論である。この理論の特徴は、刺激が直接行動に影響を及ぼすのではなく、刺激そのものが人間の認知的処理を介して行動に影響を及ぼすことに着目していることである。

「目標理論志向」とは、個人が抱く目標の認知的な特質と機能に基づき、個人が意図的に動機づけのあり方を決定すると考える立場である[56]。つまり、従来の動機づけの研究では目標を単次元的な特質を持つものとして扱ってきたが、目標志向性の理論では、人の中には達成すること自体を目標とする課題志向性と他者との比較を重視し自尊心の維持・高揚を目標とする自我志向性という異なる複数の目標が存在すると仮定する[11]。そして、さまざまな環境的要因や個人的要因が課題志向性や自我志向性といった目標の持ち方に影響を与え、それらが達成行動を規定すると考える理論である。

本研究は、指導者からのサポートの認知度が個人のソーシャルスキルの獲得状況でどのように変化しているのか、またそれにより意欲がどう関係しているのかをみていくため、「期待一価値理論志向」に位置付けられると考える。

第2節　達成動機

(1)概要

達成動機の研究はMurrey[50]が面接・質問・TAT(主題統覚検査)を用いて、社会的存在としての人間の「社会的欲求」のリストを作成し、その中に「達成(Achievement)」を位置づけたことに端を発している。その後、McClleland や Atkinson がこの「達成」に注目し、投影法による達成動機の測定法を開発したこと[43]をきっかけに急速に研究が発

展していった。その後、McClleland は社会的な経済発展と達成動機の関係 [44]や達成動機を高めるためのプログラムの開発 [45]など社会的な問題に取り組むことによって多くの研究成果を残している。一方、Atkinson らは達成動機を説明する数理モデルを提唱し、実験的研究を進めていった [2]。

達成動機とは Murrey によれば、「難しいことを成し遂げること、自然物、人間、思想に精通し、それらを処理し、組織化すること、これをできるだけ速やかに、できるだけ個人の力でやること、障害を克服し高い標準に達すること、自己を超越すること、他人と競争し他人をしのぐこと、才能をうまく使って自尊心を高めること」[50]と定義されている。また、McClleland らは、「その文化において価値があると認められる達成目標を成し遂げること」[43]と定義している。具体的な遂行に関しては、「長期間を要する達成を遂行する」、「ユニークな方法で遂行する」、「一定水準以上の遂行を行う」、「競争事態で他人をしのぐこと」と定義されている。

(2)スポーツと達成動機

スポーツ場面における達成動機の研究は、スポーツにおいて成功するためには、長期の練習や勝利への強い意欲を必要とすると考えられることから注目されてきた。当初の研究では、従来の達成動機測定尺度を用いて測定される一般的な場面での達成動機とスポーツでの技能の習得、スポーツ参加などとの関連性を検討してきた。しかしながら、スポーツ場面を対象とした場合には、スポーツ場面特有のさまざまな状況変数が存在することが指摘され、スポーツ場面に特化した達成動機測定尺度の開発が精力的に進められてきた。スポーツ場面といった特定の場面において発揮される達成動機がどのような要因によって構成されるのかを明らかにするための研究が行われてきている [38][39][51][52][53][54]。

これらの研究は、人の運動やスポーツへの行動に心理的な要因が多様であることを示すことから、指導場面においても多様な指導が重要なことを示している。さらに、運動やスポーツへの動機づけを高めるための有益な視点を提供している。

(3)スポーツ場面における達成動機の測定

達成動機の測定方法は、投影法と質問紙法に分けられる [46]。投影法による達成動機の測定方法として代表的なものは、Murrey にヒントを得て McClleland[43]によって開

発された図版による空想物語を用いた TAT 方式、Winterbottom[90]の不完全物語法(incomplete stories)、さらに、言語発達の未成熟な幼児の達成動機を測定するためにAronson[3]によって開発された言語刺激を用いない、描画表現法(graphic expression method or mood)などがある。一方、質問紙法による達成動機の測定方法として代表的なものは、Edwards[13]の EPPS(Edwards Personal Preference Schedule)、Gough ら[]の CPI(California Psychology Inventory)や Bendig[5]の達成欲求測定尺度などがある。

1950 年代前半までは投影法による測定方法が主流であったが、尺度の客観性の問題から 1950 年代中頃には質問紙法による達成動機の測定が開発された。そのため、現在では投影法による達成動機の測定は非常に少なくなり、質問紙法による達成動機の測定が主流となっている。

わが国においても、質問紙法による達成動機の測定が主流になっており、堀野[23]、堀野ら[24]、土井[86]によって作成された達成動機測定尺度などがある。

スポーツ場面における達成動機の測定方法としては、欧米で作成された質問紙を参考に尺度の開発が行われてきている。日本で作成された達成動機を測定する尺度で代表的なものは、西田ら[57]のスポーツ達成動機テスト(Achievement Motives Test in Sports：AMTS)、西田[58]の体育における学習意欲検査(Achievement Motivation in Physical Education Test：AMPET)、日本体育協会スポーツ科学委員会の松田ら[41][42]が作成した体協競技意欲検査(Taikyo Sports Motivation Inventory：TSMI)、樋口[20]の作成した達成動機尺度がある。

第 3 節　ソーシャルスキル研究

(1)ソーシャルスキル研究の概要

ソーシャルスキルとは、Argyle によって「対人相互作用を行う人が目的を達成するための効果的な社会的行動」[2]と定義された概念である。しかしソーシャルスキルの概念定義については研究者によって多様であるのが現状である。

わが国において代表的なものが、菊池によって提唱された、「対人関係を円滑にはこぶために役だつスキル」である[34]。具体的には、会話の仕方、主張の仕方など社会的場面において能力を示すものである。

近年、現代青年の対人関係が希薄化していることが指摘され[72]、適応的な関係を築

き維持していくためには、意図的な努力が必要であると論じられている[62]。このような対人関係の希薄化やコミュニケーション不全の問題は、対人関係を円滑に進める能力であるソーシャルスキルの欠如によると考えられている[25)72]。また、青年期は近い将来、社会に出て行く発達時期にあることから、価値観や生活スタイルが多様化する現代社会では協調的でしかも適切な自己表現を行える高度な社会性を身につけるべきであると考えられている[63]。特に、大学は社会人になる前の最後の教育機関であるため、大学に在籍している間に社会人として自立していくために必要なソーシャルスキルを高めていく必要があると指摘されている[63]。大坊[62]は、大学生の苦手とする対人場面の特徴を検討し、相手との関係が長期的なスパンで見通されている初対面の人とのコミュニケーション場面であることを明らかにしている。また関係継続の予期がある場合は、その後の関係への影響が考慮されることから、印象管理や親密化のための動機づけが高まり、コミュニケーション行動が増加する。したがって、関係継続が予期される場面では、よりソーシャルスキルを表出する必要があると考えられ、ソーシャルスキルの影響がみられることを示唆している。ただし、木村ら[35]は、大学生を対象に関係継続の予期とソーシャルスキルの程度が対人コミュニケーションに及ぼす影響について検討しているが、ここでは、関係継続の可能性が低いと予期されたときにソーシャルスキルの影響がみられ、ソーシャルスキルが高い者ほど相手に積極的に話しかけていたことを明らかにしている。すなわち、いずれの場合にソーシャルスキルの影響がみられるかについて統一した結果が得られていないのが現状である。

(2)スポーツとソーシャルスキル

ソーシャルスキルは、主に社会性の獲得の有用性が検討されているものであり、社会性の獲得に及ぼす体育・スポーツ活動の研究は、運動経験がパーソナリティへ及ぼす影響という枠組みの中で1950年代後半より進められてきた。花田[15]はY-G性格検査を用いて、運動選手は一般的活動性が高く外向的であるとの報告をしている。また、「スポーツマン的性格」と称される明朗・積極・忍耐心のような性格の研究が多くされてきたが[16)17)29)80]、船越[28]や岡澤[66]は、スポーツマン的性格特性の出現は、それが純粋にスポーツによって培われたのかどうかは疑問の余地があることや、運動によるパーソナリティの形成と変容の効果は一様ではないと述べており、中込[53]も同様の見解を得ている。

近年では、運動やスポーツ活動によってパーソナリティの変容が検討されるなら、「運動やスポーツ活動が社会的スキルの獲得に貢献する」という命題について論じられるようになり[88]、中川ら[52]は中学生を、松野ら[40]、青木[1]、上野ら[88]は高校生を、そして石黒[30]、島本ら[74]は 大学生を対象に、運動経験と社会的スキル関係について検討している。それぞれ運動経験は社会的スキル獲得に有効であると報告している。

第4節　ソーシャルサポート研究

(1)ソーシャルサポート研究の概要

ソーシャルサポートは、まずDurkheimの自殺論における社会的な結びつきと自殺との関連性の指摘[11]や、カウンセリングにおける無条件の肯定的配慮の重要性などが、ソーシャルサポートの概念誕生のきっかけとなった。そして時が経ち、1970年代後半までにソーシャルサポート概念へと発展する動きが活発になった。

Holmes & Rahe[22]や、Rabkin & Struening[69]は、生活に大きな変化をもたらすような出来事(配偶者の死、結婚、失業等)が個人の健康に及ぼす影響についての研究を行い、ストレスが多くかかると病気にかかる確率が高くなるが、誰もが病気にかかるわけではなく、ストレスだけが原因となり病気にかかるわけではないと結論づけた。そこでその違いは何であるのかと考えた研究者たちは、ストレスを受けても病気にならずにすむようにするためには、その仲介要因に介入すればよいと考えるようになり、ソーシャルサポートの健康維持・増進効果と地域精神衛生分野が合わさって、注目されるようになったのである。

アメリカの疫学者であり医者でもあるCassel[7]は、ソーシャルサポート研究の先駆者である。彼は、疫病の発生率、回復率の統計データから、都市環境の悪化(人口の過密や近隣関係の希薄化)に伴う人々の結びつきの崩壊が他者からの適切なフィードバックを妨げ、心身の健康に悪影響を与える点に着目した。ストレス状況下で健康を害する人と健康でいられる人が存在することから、そのような社会環境でストレス状態からの回復を方向づけるためには、重要な他者からのフィードバックが関係しているのではないかという仮説を立てたのである。そして、供給されたソーシャルサポートが健康を保護し、免疫学的観点からストレス研究においてストレッサーとその影響を防ぐ要因との両面から疾患の原因を探るべきであると主張した。

Casselとほぼ同時期に精神医学者であるCaplanも、ある地域の特性が地域住民の

精神衛生にどのように影響するかについて検討し、「疫病に対して緩衝作用を示すこれら社会集合体の特質は、そのような関係の中で、ある人がかけがえのない個人として扱われることである」と述べた[6]。そして精神疾患の治療のみならず予防が重要であり、「非専門家による援助」の役割を強調した。つまり、人々のメンタルヘルスの促進のためには、専門家ではない普通の人々がいかにお互いを支え合い困難を乗り越えていくことができるのか、ということについての重要性を述べたのである。また彼は、日常的な対人関係の持つ積極的な役割を強調し、それを「ソーシャルサポートシステム」と呼ぶことによって、ソーシャルサポート研究を生み出す母体となった。また、日常的な人間関係の機能を、①情緒的負担の軽減、②問題の共有、③対処のために必要な資源の提供、の3つにまとめ、Caplanの考え方は以後サポートの内容面への言及へとつながった。この二人の主張に対して、Cobbはソーシャルサポートを概念的に明確に定義し、ストレスのもたらす悪影響を緩和する効果について理論的に整理した。彼はソーシャルサポートを情報として捉え、「人がある情報を受け取ることによって、自分が世話を受け、愛され、あるいは尊重され価値のあるものとみなされ、相互的な責務を持ったネットワークの一員であると信じることができるとき、その情報をソーシャルサポートと呼ぶ」[8]とした。彼は、ソーシャルサポートを援助されている、あるいはその可能性があるという感覚を導く情報であるとした点に特徴がある。

また、代表的な定義としてHouseの「①情緒的サポート（共感、愛情、信頼）、②道具的サポート（直接的な援助行動）、③情報的サポート（対処のための有益な情報）、④評価的サポート（考えや行為を認める自己評価のための情報）のいずれかを含む人と人との相互作用」[26]がソーシャルサポートであるとしている。

サポート内容への言及はさまざまな研究者によって行われ、2~6種類程度の内容が指摘されており、おおむね情緒的なものと道具的なものとに大別される[38)69)71)76]。橋本によると、広義には情緒的サポートとは心理的な不快感の軽減や自尊心の維持・回復を促すような機能を持つものであり、道具的サポートとは個人が抱える問題そのものを直接ないし間接的に解決する機能を持つものである[19]としている。

(2)スポーツとソーシャルサポート

スポーツ参加及び、習慣化に影響を与えている要因の一つとして、ソーシャルサポートが挙げられる。

ソーシャルサポートとスポーツとの関連についての研究では、怪我をした競技者が回復する過程において、他者からのサポートが競技者の心理的サポートとして重要な役割を果たしていることを検討した研究や[67]、ソーシャルサポートが競技者の競技スポーツ参加・継続に対するストレスや心配を軽減するとの報告[69]、スポーツにおけるパフォーマンスにポジティブな影響を与えていると報告[73]がある。

わが国でも、競技者を対象にソーシャルサポートとバーンアウトとの関連が検討されるようになり[67,85]、ソーシャルサポートの享受がバーンアウトの抑制効果及び、メンタルヘルスとの関連性が明らかにされている[68]。さらに、スポーツ活動の継続には所属する組織への適応感が関連しているという視点から、大学生競技者を対象にクラブ・チーム活動における適応感とソーシャルサポートに関する検討が行われ、ソーシャルサポートを認知することによって、クラブやチームに対する適応感を形成していることが示されている[84]。すなわち、スポーツ活動におけるソーシャルサポートの享受が、競技の実施・継続に関する精神的健康や適応感を高める役割を果たしているといえる。また。菅[76]は、ソーシャルサポートの認知とスポーツ実施に関しての検討を行い、スポーツ実施率の高い人ほど他者からのサポートを認知していることを明らかにしている。

(3)スポーツにおけるソーシャルサポートの測定

ソーシャルサポートの測定は、主に質問紙法が行われている。Sallis et al.[65]は、運動や身体活動に関する様々なサポートについて、家族や友人などの重要な他者からどの程度サポートを受けているか評価する尺度を開発し、運動の継続には運動に関連するサポートが重要であることを報告している。わが国では、板倉[32]が運動や身体活動に関するソーシャルサポート尺度を作成し、また土屋ら[83]は、スポーツ選手を対象にソーシャルサポート尺度(Athletic Social Support Scale：ASSS)を作成している。いずれにおいても、ソーシャルサポートの有効性が報告されている。

第5節　指導者と競技者の関係

トレーニング現場において、指導者は、競技者の技術獲得、練習の質に大きな影響を及ぼしている。植田[87]は、「コーチの言動や態度が選手に変化を起こさせる。変化は選手の動きであったり、情動であったりする。時には、それがパフォーマンスを左右

することにもなるのである」と述べ、指導者と競技者の関係の重要性を指摘している。指導において、指導者が競技者に対してどのような指導を行えば、競技者の行動を指導者の意図するように効果的に変化させることができるのかということは、指導者にとって極めて重要である[48]。指導者の指導が効果的に行われるためには、競技者との積極的な関わりやコミュニケーションが求められる。倉藤ら[37]の研究によると、競技成績が高く部活動における自主性の高い競技者は、自主的に技術を磨く意識が強く、指導者からアドバイスをもらうために指導者との関わりを多く持とうとしていることが報告されている。また、吉井[92]によると「選手は敏感に指導者の心の中にあるものを感じる。指導者が選手とのコミュニケーションを取ることを苦手と感じていると、選手もそれを感じ取り、一層関係を作り上げていることが難しくなる。指導者は積極的な選手との関わりを増やし、コミュニケーションを取っていくことが選手育成において、一つの重要な要素となるだろう」と述べている。さらに、Wootten Morgan[91]は、「いつでもどんなときにも、話し合うこと」が競技者にとっても指導者にとっても最良であるとしている。つまり、指導者は競技者と関わる時間を増やし、指導者が積極的に選手と関わりをもちコミュニケーションを取るように心がけることで、競技者からのコミュニケーションも増え効果的かつ効率的に指導が行えると考えられる。また、積極的に選手と関わりを持ってコミュニケーションを取ることは、高畑[78]が報告しているような「コーチが良かれと思って出している指示が、まったくの逆効果になっているという場面が非常に多く見られる」とした問題や、「コーチと選手の心理面のズレが信頼関係を崩す」とした問題を最小限抑えることが可能であると考えられる。

競技者は、指導者からの様々な手段による指導を受ける。その中で、「言葉がけ」を手段とした伝達による指導は外在的フィードバックの代表的な手段であり[65]、指導者からの言葉がけが、競技者に対して重要な役割を果たすことは多くの研究ですでに確認されている[10)49)51)77)91)]。また、指導者が競技者に対して指導する際、言葉がけの指導が最も多く用いられているとの報告がされている[87]。大橋は、指導者 11 名と選手 133 名を対象に、陸上競技の準備期である冬期トレーニングでの短距離および跳躍競技者における運動技術の指導及びコミュニケーションの頻度を調査した。その結果、言葉がけによる指導、視覚的指導、筋運動感覚的指導がある中で、指導者は、指導局面において学習自標の提示およびフィードバックの際、言語がけを用いる割合は、全体の約 60%を占めることを報告している[65]。しかしながら、指導者から一度に多くの

情報が与えられた場合、それらをうまく処理できず、かえって混乱を招いてしまうこともある。植田[87]による個人スポーツと集団スポーツの競技者を対象としたアンケート調査において、競技者は、試技数回につき一回程度の言葉がけを望むという結果が得られており、言葉がけを適当な頻度で用いる必要性を示唆している。

これらのことから、指導者は競技者の意欲に密接に関わっていることが考えられる。また、指導者との関係性次第では、指導者からのサポートに対する認知度が変化することも考えられるため、競技者が指導及びサポートを享受できずに、意欲・パフォーマンスの減退へと繋がることが推察される。

第3章　研究目的

学生競技者を対象に、ソーシャルスキルと指導者からのサポート、競技意欲の関連を検討することで、競技者の意欲減退を防ぐための一資料を得ることである。

第 4 章　研究方法

第 1 節　調査方法

A 大学の運動部に所属する大学生競技者 841 名を対象に無記名自記式調査を実施した。得られた有効回答数は 595 名(男性 466 名、女性 129 名)であり、有効回答率は 70.7%、有効回答者の平均年齢は 20.1 歳(SD=10.91)であった。質問紙の配布・回収は、各部のマネージャー、もしくは部員に以来した。質問紙の回答に関する説明は質問紙の中に明記し、回答への了承を得た者のみに回答を求めた。

第 2 節　調査期間

調査期間は平成 26 年 10 月から 11 月であった。

第 3 節　質問紙の構成

(1)　対象者の属性

性別、年齢、学年、所属クラブ、競技レベル、レギュラーか否かについて回答を求めた。

(2)　Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版 (KISS-18)

対象者のソーシャルスキルを評価するため、菊池 [32]の開発した Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版 (KISS-18)を採用した。この尺度は、「問題解決力(5 項目)」、「トラブル処理(6 項目)」「コミュニケーション能力(7 項目)」の全 18 項目 3 因子構造からなる尺度である。本研究では、菊池の研究に従い、項目に対して自分の考えにどの程度あてはまるかについて「全くあてはまらない: 1 点」から「よくあてはまる: 5 点」までの 5 段階で回答を求めた。

(3)　Athletic Social Support Scales (ASSS)

対象者の指導者からのサポート認知度を評価するため、土屋ら [75]が開発した Athletic Social Support Scales (ASSS)を採用した。この尺度は、「競技者が競披生活を円滑に進めるために必要となる他者との関わり」と捉え、競技場面に即した構成要素とその活用法について検討を行い、競技者が享受しているサポートを数量的に測定

する。この尺度は、全24項目から構成されており、「親愛サポート(9項目)」、「娯楽関連サポート(6項目)」、「自尊サポート(4項目)」、「指導サポー ト(5項目)」の4つの下位尺度から構成される 4 因子構造の尺度である。本研究では、土屋ら[17]の研究に従い、項目に対して自分の考えにどの程度あてはまるかについて「全くあてはまらない: 1点」から「よくあてはまる: 5点」までの5段階で回答を求めた。

また、この尺度は指導者からのサポートに限定して評価するものとして作成されていないため、回答者が指導者からのサポートと認識して回答できるように、「指導者との関わりや援助」との文言を加えて質問した。

(4) 達成動機尺度

達成動機を測定する項目は、樋口[18]が作成した達成動機尺度を用いた。この尺度は、「自己向上(12項目)」、「イニシアティブ(7項目)」、「活動(11項目)」の3因子で構成されており、この尺度は達成動機を多次元で捉えることが可能である。本研究では、樋口の研究にならい、項目に対して自分の考えにどの程度あてはまるかについて「全くあてはまらない: 1点」から「よくあてはまる: 5点」までの5段階で回答を求めた。

第4節 分析方法

(1) はじめに、属性別による各尺度得点の比較を行うため、得られたデータを以下のように分類した。その後、各属性を独立変数、各尺度得点を従属変数とし、t検定および分散分析を行った。

①対象者の競技レベルを、地区大会・県大会・地方大会・全国大会・国際大会・その他に分類した。

②対象者の所属クラブを、集団競技と個人競技に分類した。内訳は、集団競技(サッカー、野球、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール、ハンドボール)、個人競技(陸上競技、水泳、トライアスロン、柔道、テニス、体操競技)であった。

③対象者を、レギュラー経験の有無で、レギュラー・非レギュラーに分類した。

(2) 続いて、下位尺度間および合計においての関連をみるため、KISS-18、ASSS、達成動機尺度の相関分析を行った。

①KISS-18 と達成動機の相関

②ASSS と達成動機の相関

③KISS-18 と ASSS の相関

(3) 最後に、ソーシャルスキルおよび指導者からのサポートが達成動機に及ぼす影響を検討するため、KISS-18、ASSS の得点を平均値±1/2SD で低群・中群・高群に分類し、分散分析を行った。3 群を独立変数、達成動機の各因子、合計得点を従属変数とした。

第 5 節　データ処理

得られたデータに欠損値は確認されなかったため、全てのデータを分析に用いた。分析は SPSS ver. 20.0 for Windows を用いて行った。

第 6 節　倫理的配慮

本研究は、順天堂大学大学院の倫理審査委員会の承認（順大院ス倫第 26-14 号）を得て実施された。対象者のプライバシー保護のため、本研究以外の目的では一切使用しないことの旨を文書に記載し、調査への協力をいただいた。

第5章　結果

第1節　属性別による各尺度得点の比較（t 検定および分散分析）

(1) 属性別による KISS-18 得点の比較

属性によってソーシャルスキルに差があるのかを検討するため、対象者の属性別（性別、年齢、学年、競技種目、競技での役割、現在の競技レベル）に KISS-18 の因子得点および合計得点の平均値の差を t 検定及び分散分析を用いて比較した（表1）。

その結果、性別では、「コミュニケーション」（$p < .001$）、「問題解決力」（$p < .001$）、「トラブル処理」（$p < .001$）、「KISS-18 合計得点」（$p < .001$）の全ての因子得点及び合計得点において男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。

学年では、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。競技種目では、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。

競技での役割では、「コミュニケーション」（$p < .001$）、「問題解決力」（$p < .001$）、「トラブル処理」（$p < .001$）、「KISS-18 合計得点」（$p < .001$）の全ての因子得点及び合計得点において非レギュラーよりもレギュラーの方が有意に高い得点を示していた。

現在の競技レベルでは、「コミュニケーション」において、都道府県大会よりも地方大会が（$p < .001$）、都道府県大会よりも全国大会が（$p < .001$）、地方大会よりも全国大会が（$p < .001$）、全国大会よりも国際大会が（$p < .001$）有意に高い得点を示していた。「問題解決力」において、都道府県大会よりも地方大会が（$p < .001$）、都道府県大会よりも全国大会が（$p < .001$）、全国大会よりも国際大会が（$p < .001$）有意に高い得点を示していた。「トラブル処理」において、都道府県大会よりも地方大会（$p < .001$）、全国大会（$p < .001$）、国際大会（$p < .001$）が、地方大会よりも全国大会（$p < .001$）、国際大会（$p < .001$）が、全国大会よりも国際大会が（$p < .001$）有意に高い得点を示していた。「KISS-18 合計得点」において、都道府県大会よりも地方大会（$p < .001$）、全国大会（$p < .001$）、国際大会（$p < .001$）が、地方大会よりも全国大会（$p < .001$）、国際大会（$p < .001$）が、全国大会よりも国際大会が（$p < .001$）有意に高い得点を示していた。

(2) 属性別による ASSS 得点の比較

属性によって指導者サポートに差があるのかを検討するため、対象者の属性別（性

別、年齢、学年、競技種目、競技での役割、現在の競技レベル）に ASSS の因子得点および合計得点の平均値の差を t 検定及び分散分析を用いて比較した（表 2）。

その結果、性別では、「娯楽」（$p < .001$）、「指導」（$p < .001$）、「ASSS 合計得点」（$p < .001$）の因子得点及び合計得点において男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。

学年では、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。競技種目では、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。

競技での役割では、「親愛（$p < .001$）、「娯楽」（$p < .001$）、「自尊」（$p < .01$）、「指導」（$p < .001$）、「ASSS 合計得点」（$p < .001$）の全ての因子得点及び合計得点において非レギュラーよりもレギュラーの方が有意に高い得点を示していた。

現在の競技レベルでは、「親愛」において、地方大会よりも全国大会が（$p < .001$）有意に高い得点を示していた。「娯楽」において、都道府県大会よりも地方大会（$p < .001$）、全国大会が（$p <.001$）、地方大会よりも全国大会（$p <.001$）が有意に高い得点を示していた。「自尊」において、都道府県大会よりも国際大会（$p <.01$）が、地方大会よりも国際大会（$p <.01$）が、全国大会よりも国際大会（$p < .01$）が有意に高い得点を示していた。「ASSS 合計得点」において、都道府県大会よりも地方大会（$p<.01$）、全国大会（$p <.001$）、国際大会が（$p <.001$）、地方大会よりも全国大会（$p <.01$）、国際大会（$p <.001$）が、全国大会よりも国際大会（$p < .001$）が有意に高い得点を示していた。

(3) 属性別による達成動機得点の比較

属性によって達成動機に差があるのかを検討するため、対象者の属性別（性別、年齢、学年、競技種目、競技での役割、現在の競技レベル）に達成動機尺度の因子得点および合計得点の平均値の差を t 検定及び分散分析を用いて比較した（表 3）。

その結果、性別では、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。学年では、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。また競技種目においても、全ての因子得点及び合計得点において有意差は認められなかった。

競技での役割では、「自己向上（$p < .01$）、「活動」（$p < .001$）、「イニシアティブ」（$p < .01$）、「達成動機合計得点」（$p < .001$）の全ての因子得点及び合計得点において非レ

ギュラーよりもレギュラーの方が有意に高い得点を示していた。

現在の競技レベルでは、「自己向上」において、都道府県大会よりも地方大会が（p <.001)、有意に高い得点を示していた。「活動」において、都道府県大会よりも地方大会が（p < .001)、有意に高い得点を示していた。「イニシアティブ」において、都道府県大会よりも地方大会（p < .001)、全国大会（p <.001)、国際大会（p <.001）が、地方大会よりも国際大会（p <.001）が、全国大会よりも国際大会が（p < .001）有意に高い得点を示していた。「達成動機合計得点」において、都道府県大会よりも地方大会（p < .001)、全国大会（p <.001）が、有意に高い得点を示していた。

第 2 節　KISS-18、ASSS および達成動機における相関（相関分析）

(1) KISS-18、ASSS および達成動機得点の相関

ソーシャルスキルおよび指導者からのサポート、競技意欲の関連を検討するため、KISS-18、ASSS および達成動機尺度の合計得点における Pearson の積率相関係数を算出した（表 4)。その結果、KISS-18 合計得点と ASSS 合計得点の相関は r=0.63（p <.01）であり、KISS-18 合計得点と ASSS 合計得点の間に有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、KISS-18 合計得点と達成動機合計得点の相関は r=0.60（p <.01）であり、KISS-18 合計得点と達成動機合計得点の間に有意な中程度の正の相関関係が認められた。そして、ASSS 合計得点と達成動機合計得点の相関は r=0.72（p <.01）であり、ASSS 合計得点と達成動機合計得点の間に有意な強い正の相関関係が認められた。

(2) KISS-18 と達成動機得点の相関

ソーシャルスキルおよび競技意欲の関連を検討するため、KISS-18 および達成動機尺度の各因子得点における Pearson の積率相関係数を算出した（表 5)。

その結果、KISS-18 の「コミュニケーション」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.49（p <.01)、「活動」との相関は r=0.46（p <.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.60（p <.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、合計得点との相関は r=0.55（p <.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

KISS-18 の「問題解決力」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r

=0.56（p <.01)、「活動」との相関は r=0.53（p <.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.63（p<.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、達成動機尺度の合計得点との相関は r=0.61（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

KISS-18 の「トラブル処理」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.43（p <.01)、「活動」との相関は r=0.42（p <.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.58（p<.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、達成動機尺度の合計得点との相関は r=0.50（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

KISS-18 の合計得点においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.53（p<.01)、「活動」との相関は r=0.51 (p<.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.66（p <.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点と有意な中程度の正の相関関係が認められた。

(3) ASSS と達成動機得点の相関

ASSS と達成動機得点の関連を検討するため、ASSS および達成動機尺度の各因子得点における Pearson の積率相関係数を算出した（表 6)。

その結果、ASSS の「親愛」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.62（p <.01)、「活動」との相関は r=0.64（p <.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.66（p<.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、合計得点との相関は r=0.68（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

ASSS の「娯楽」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.47(p<.01)、「活動」との相関は r=0.43 (p<.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.63 (p<.01)であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、達成動機尺度の合計得点との相関は r=0.64（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

ASSS の「自尊」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.62(p<.01)、「活動」との相関は r=0.63 (p<.01)、「イニシアティブ」との相関は r=0.64 (p<.01)であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、達成動機尺度の合計得点

との相関は r=0.66（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

ASSS の「指導」においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.44（p<.01）、「活動」との相関は r=0.43（p<.01）、「イニシアティブ」との相関は r=0.56（p<.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、達成動機尺度の合計得点との相関は r=0.56（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

ASSS の合計得点においては、達成動機尺度の「自己向上」との相関は r=0.66（p<.01）、「活動」との相関は r=0.67（p <.01）、「イニシアティブ」との相関は r=0.67（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点と有意な中程度の正の相関関係が認められた。

(4) KISS-18 と ASSS 得点の相関

ソーシャルスキルと指導者からのサポートの関連を検討するため、KISS-18 および ASSS の各因子得点における Pearson の積率相関係数を算出した（表 7）。

その結果、KISS-18 の「コミュニケーション」においては、ASSS の「親愛」との相関は r=0.55（p <.01）、「娯楽」との相関は r=0.89（p <.01）、「自尊」との相関は r=0.45（p <.01）、「指導」との相関は r=0.90（p <.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、合計得点との相関は r=0.54（p<.01）であり、ASSS の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

KISS-18 の「問題解決力」においては、ASSS の「親愛」との相関は r=0.63（p<.01）、「娯楽」との相関は r=0.80（p <.01）、「自尊」との相関は r=0.57（p <.01）「指導」との相関は r=0.80（p<.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、ASSS の合計得点との相関は r=0.63（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

KISS-18 の「トラブル処理」においては、ASSS の「親愛」との相関は r=0.57（p<.01）、「娯楽」との相関は r=0.85（p<.01）、「自尊」との相関は r=0.48（p<.01）、「指導」との相関は r=0.78（p<.01）であり、有意な中程度の正の相関関係が認められた。また、ASSS の合計得点との相関は r=0.56（p <.01）であり、ASSS の全ての因子得点および合計得点との間で有意な中程度の正の相関関係が認められた。

KISS-18の合計得点においては、ASSSの「親愛」との相関はr=0.63（p<.01）、「娯楽」との相関はr=0.93（p<.01）、「自尊」との相関はr=0.54（p<.01）、「指導」との相関はr=0.91（p<.01）であり、達成動機尺度の全ての因子得点と有意な中程度の正の相関関係が認められた。

第3節　KISS-18およびASSSが達成動機に及ぼす影響

ソーシャルスキルおよび指導者からのサポートの程度が競技意欲に及ぼす影響について検討するため、KISS-18の3群（低群、中群、高群）およびASSSの3群（低群、中群、高群）別に達成動機尺度の因子得点および合計得点の平均値の差について分散分析を用いて比較した（表8）。なお、分析に先立ちKISS-18およびASSSの得点から平均値と標準偏差を用いて低群、中群、高群の3群に分類した。

その結果、KISS-18では、達成動機の「自己向上」において、低群よりも中群の方が（p < .01）有意に高い得点を示していた。達成動機の「活動」においては、低群よりも中群の方が（p < .01）、中群よりも高群の方が（p < .05）有意に高い得点を示していた。達成動機の「イニシアティブ」においては、中群よりも高群の方が（p < .05）有意に高い得点を示していた。達成動機の合計得点においては、中群よりも高群の方が（p < .05）有意に高い得点を示していた。

ASSSでは、達成動機の「自己向上」において、低群よりも中群の方が（p < .05）、中群よりも高群の方が（p < .05）有意に高い得点を示していた。達成動機の「活動」においては、中群よりも高群の方が（p < .01）有意に高い得点を示していた。達成動機の「イニシアティブ」においては、低群よりも高群の方が（p < .05）有意に高い得点を示していた。達成動機の合計得点においては、中群よりも高群の方が（p < .01）有意に高い得点を示していた。

第6章　考察

第1節　属性でみたソーシャルスキル、指導者からのサポートおよび競技意欲の現状

(1)性差について

先行研究では、ソーシャルスキルおよびソーシャルサポートは女性の方が高い傾向を示すと報告されている。本研究においてもソーシャルスキルはすべての因子、合計得点で男性よりも女性の方が高く、指導者からのサポートにおいても、娯楽、指導、合計得点で女性のほうが有意に高い得点を示していた。しかし、達成動機については差が確認されなかった。これについて、「男性は活動のパートナーを求めるのに対し、女性は親密な腹心の友、同じ感情を共有する友を求める」[84] といった理論がある。これをもとに説明するならば、女性はソーシャルスキルが高いことによって、指導者から享受した多くのサポートを好意的に解釈することができ、その結果、指導者に対する心理的接近度を高めることになるのではないだろうか。一方男性は、指導者のサポートを役割行動と捉えており、普段から関わりの多いチームメイトからのサポートを、指導者に比べより多く認知しているのではないかと考えられる。よって、意欲向上、もしくは意欲減退を防ぐことになると考えられる。

(2)レギュラー・非レギュラーの差、および競技レベル差について

レギュラー群は非レギュラー群に比べ、ソーシャルスキル(コミュニケーション)・指導者サポート(親愛・指導)・達成動機(自己向上・活動)において有意に高い結果であった。

本研究で対象としたのは競技者であり、いわゆる競技スポーツに身を置いている学生たちである。競技スポーツでは競争が起こり勝敗を決していくことになり、他者に勝利するために攻撃行動がみられ、それが自らの、あるいはチームのパフォーマンスの発揮つながることにもなると報告がある[79]。競技スポーツはソーシャルスキルの獲得に適した環境であると考えられるが、一方で、過剰な競技志向や勝利至上主義の結果、偏った心理状態を形成する可能性も指摘されており[61][73]、スポーツ選手にみられる社会性の欠如も稀ではない[53]。これらのことから、ソーシャルスキルの低い競技者は周囲からのサポートを十分に享受することが難しくなっていると考えられ、また、サポートを享受できないことでソーシャルスキルの獲得に繋がらないことが予想され

る。さらに、高野らによると、非レギュラーは指導者に対する依存度が高く、自信が低いとの報告がある[79]。よって、非レギュラーや競技レベルの低い大学生競技者はコミュニケーションを取りづらい状態にあることで指導者との心理的接近度が低く、サポートを満足に享受できていないと認知していることが予想される。それにより競技意欲の減退か、もしくは向上が阻害されている可能性が考えられる。

第2節　ソーシャルスキル、指導サポートおよび競技意欲の関連

ソーシャルスキル、指導者サポート、達成動機の各下位尺得点の低・中・高群は、各因子と合計得点において、中程度からやや強い相関が認められる結果となった。これについて、以下のように考察する。

本研究では、KISS-18 得点と ASSS 得点にやや強い相関がみられた。これについては、近年、ソーシャルサポートを対人的な相互作用の文脈で捉える研究が散見される中、個人のサポート提供量と受容量との間には正の相関があることを報告している研究[25]や、サポートを上手に提供する能力の欠如は、他者との関係に葛藤関係を生じさせ、個人がサポートを必要とする際に適切な要求が困難になることを示唆する報告[89]を支持する結果となったといえよう。これらのことから、他者への積極的なサポートは提供した相手のサポート行動を促進させたり、必要な場合に相手にサポートを要求しやすい良好な人間関係を維持したりすることにつながると考えられる。また、ソーシャルスキルとソーシャルサポートの関連を見た研究もされており、堀は、大学生のソーシャルスキルが身近な友人からのソーシャルサポート対して正の影響を受けていることを明らかにしている[25]。さらに、運動部やクラブといった集団には、様々な対人関係が成立しており、この集団では、共通の目的を持つ人たちや卓越した人たちと交流し、共同、競争する中からかけがえのない仲間をつくり、人間関係、チームワーク、リーダーシップ、役割などに関わる社会的知識を得ることができるとされている[60][66]。スポーツ活動は、指導者やチームメイト、対戦相手などの他者の存在無くしては成立しえず、常に対人関係の中で個人やチームのパフォーマンスが発揮されるといえる。その際、バーバルとノンバーバルによる情報の伝達と解読といったコミュニケーション能力が要求され、必要とされる場面が豊富に存在するといえよう。これにより、ソーシャルスキルの獲得を促すと推察される。すなわち、運動部活動やクラブに所属することは、青年期に獲得すべき社会性を獲得するために必要な環境を提供して

いると考えられる。よって、ソーシャルスキルの高低によりサポート受容が変動することで、意欲の向上か、もしくは減退へと進むことが考えられる。

第3節　KISS-18およびASSSが達成動機に及ぼす影響

本研究では、ソーシャルスキルおよび指導者サポートが高い大学生競技者は、達成動機が高いという結果であった。

Mclleland[44]によると、組織体においてはリーダーシップ機能が組織風土の「自律と挑戦」、「温かさ」という2次元を決定づけるほどのものであったのに対し、スポーツ集団においてメンバーの達成動機と深く関わっていたのは組織風土とチームメイトに対する満足度であると報告している。企業のように明確な権威や制度が存在しないスポーツ集団においては組織の公的システムやリーダーシップといったフォーマル要因ではなく、日頃感じている組織の雰囲気や指導者、チームメイトに対する満足度といったインフォーマル要因がメンバーの達成動機を決定づけるのではないかと考えられる。

また、競技者にとっては「親愛サポート」のように心理的な安寧を意図したものばかりではなく、お互いに認め合い切磋琢磨するような行為も、サポートと位置づけられると解釈できる。伊藤)は、チーム内の協調性を高め、存在を互いに認め合い、切磋琢磨できる環境にて選手の意欲が高まることを示している。さらに、競技活動において、指導者やチームメイトなどの重要な他者とのコミュニケーションが必要であり、これが欠如することにより、対人関係で孤立を深めるとされている。よって、ソーシャルスキルが高いことにより、重要な他者である指導者とより良い関係を築くことでサポートを好意的に享受することができるのではないだろうか。それが、意欲の向上に向かうのではないかと考えられる。

第4節　今後の課題

まず本研究では、運動部に所属して現在活動を行っているかどうかの基準でソーシャルスキル、ソーシャルサポート、競技意欲の関連、差の比較を行った。すなわち、過去からの活動の継続を考慮していない。どのような時期、期間で継続的に経験されるかにより、影響が異なるのではないかと考えられる。また、具体的な内容についても考慮していない。どのような内容、強度の活動なのか、どのような指導やサポート

が実際に行われているかをより詳細に把握し、検討することにより、関連の解明にさらに近づくと考えられる。

最後に、本研究の相関分析において、大学生競技者はソーシャルスキルよりも指導者からのサポートを重視している傾向にあった。今回の結果のみでは断言することは難しいものの、競技意欲の減退を防ぐためには、個人のソーシャルスキルの獲得状況よりも、指導者からのサポートの方が重要となる可能性が示唆されている。これは、今後の研究で解明されることに期待する。

第7章　結論

本研究より、以下の結論が得られた。

1. 大学生競技者におけるソーシャルスキルは、男性よりも女性の方が高いことが示された。
2. 大学生競技者におけるソーシャルサポートは、男性よりも女性の方が「娯楽関連」および「指導」のサポートを享受していると認知していることが示された。
3. 非レギュラーよりもレギュラーの方がソーシャルスキル、ソーシャルサポートおよび競技意欲は高く、さらに競技レベルが上がるほど高いことが示された。
4. 大学生競技者におけるソーシャルスキル、ソーシャルサポートおよび競技意欲は相互に関連し合っていることが示された。
5. 大学生競技者においてソーシャルスキルが高い者ほど、競技意欲も高いことが示された。
6. 大学生競技者においてソーシャルサポートを享受している者ほど、競技意欲も高いことが示された。

以上の結果から、競技者の意欲減退を防止するためには、ソーシャルスキルと指導者からのサポートが重要であることが示唆された。

要約

【背景】

大学生競技者において、競技成績の低迷、学業と競技生活の両立、指導者との関係などから、心理的問題を抱えている者が多い。また、競技力の低下や怪我、競技そのものからのドロップアウト等の問題も、競技意欲の減退によって誘発されやすいことが報告されており、身体的、心理的側面において、競技意欲の減退は避けなければならない要因といえよう。近年、競技者の心理学的諸問題に対処するため、ソーシャルスキルとソーシャルサポートが注目されている。例えば、ソーシャルサポートは、バーンアウトの抑制因子となり、さらに高いソーシャルスキルを持つ選手は、ソーシャルサポートを享受しやすいことが報告されている。しかし、競技意欲がソーシャルスキルおよびソーシャルサポートとどのような関連があるのかについては十分な検討がなされていない。

【目的】

本研究は、大学生競技者のソーシャルスキル、および指導者のサポートが競技意欲にどのように関連しているのかを検討することとした。

【方法】

2014 年 11 月に、首都圏にある A スポーツ系大学の運動部に所属する大学生競技者を対象に質問紙調査を実施した。得られた有効回答数は、595 名であった。質問紙の構成は、ソーシャルスキルの程度を評価する KISS-18、指導者からのサポートの認知度を測る ASSS、競技者の意欲を評価する達成動機尺度である。分析は、相関分析、t 検定および分散分析を用いた。

【結果及び考察】

個人の属性により各尺度の得点を比較したところ、KISS-18、ASSS 得点は、女性が有意に高く、先行研究を支持する結果であった。また、非レギュラーに比べレギュラーは、KISS-18、ASSS、達成動機尺度得点が有意に高く、さらに競技レベルが上がるほど得点が高い結果となった。相関分析の結果、各下位尺度得点、合計得点は、中程度の正の相関を示していた。KISS-18、ASSS の程度（低・中・高群）により達成

動機尺度の得点を比較したところ、低・中群と比べ高群の方が有意に高いことが示された。

【結論】

① 大学生競技者のソーシャルスキル、指導者のサポートおよび競技意欲は、相互に関連がある。

② 大学生競技者においてソーシャルスキルが高い者、および指導者サポートの認知度が高い者ほど、競技意欲が高い傾向にある。

引用文献

1) 青木邦夫(2005) 高校運動部員の社会的スキルとそれに関する要因. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 5,25-34.

2) Argyle, M. (1983) The Psychology of interpersonal behavior. (4th ed.). Harmondsworth , Penguin.

3) Aronson, E. (1958) The need for achievement as measured by graphic expression. In Atokinson, J. W. ed., Motives in Fantasy, Action, and Society. Van Nostrand , New York.

4) Barefield, S, and McCallister, S. (1997) Social sup-port in the athletic training room ; Athletes expectations of staff and student athletic trainers, J. Athl. Train., Vol.32, No.4,333-338.

5) Bendig, A . W. (1964) Factor analytic scales of need achievement. Journal of Gender Psychology., 70,59-67.

6) Capran, G. (1974) support systems and community mental health.Behavioral Publications：New York. 近藤喬,増野肇,宮田洋三,訳(1979) 地域ぐるみの精神衛生. 第1版,13-48, 星和書店, 東京.

7) Cassel, J. (1974) Psychological processes and "stress" Theoretical folmulations. International Journal of Health Service, 4, 471-482.

8) Cobb, S. (1976) Social support as a mediator of life stress. Psychosomatic Medicine, 38,300-314.

9) Cohen, S. (1988) Psychosocial models of the role of social support in the etiology of physical dis-case, Health Psychol., 7,269-297.

10) Cote, J., Salmela, J.H., Trudel, P., Baria, A., and Rus-sell, S.J. (1995) The coaching model ：A grounded as-sessment of expert gymnastic coaches' knowledge. J. Sport Exerc Psychol., 17, 1-17. 島崎崇史,吉川政夫(2012) コーチのノンバーバルコミュニケーションに関する研究. コミュニケーション能力、及びコーチング評価との関連性. 体育学研究, 57,427-447. より引用

11) Durkheim, E. (1987) Le Suiside. Etude de sociologie , Pressess Universtaries de France. 宮島喬訳(1985) 自殺論. 中央公論社, 東京. より引用

12) Dweck, C. S. (1986) Motivational processes affecting learning. American Psychologist. 41, 1040-1048.

13) Edwards, A. L. (1954) Edwards personal preference schedule. Psychological Corporation., 肥田野直(監訳) (1970) EPPS 性格検査. 日本文化科社, 東京.

14) Gough, H, G. : Manual for the California Psychological Inventory. Consulting Psychologist Press. (1957) CPI 研究会訳編(1967) 日本版カリフォルニア人格検査. 誠信書房, 東京.

15) 花田敬一(1957) 運動選手の性格についての一考察. 第一報, 体育学研究, 2,7,127-128.

16) 花田敬一,竹村昭,丹羽邵昭,藤原瑞子(1963) 運動部経験者の性格特性についての追跡的研究. 体育学研究, 7,1-14.

17) 花田敬一,藤善尚憲,河瀬雅夫(1966) スポーツマン的性格について. 体育学研究, 11,1,9-16.

18) 原田純治(2006) 社会心理学ー対人行動の理解ー. 第1版,第7刷, 137-146. ブレーン出版株式会社, 東京.

19) 橋本剛(2000) 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連. 教育心理学研究, 48, 94-102.

20) 樋口泰彦(1996) スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について. 実験社会心理学研究, 36, 1,42-55.

21) 久田満(1987) ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題. 看護研究, 20,2-11.

22) Holmes, T.H. & Rahe, R.H. (1967) The social Readjustment Rating Scale. Journal of Phychosomatic Research, 11,213-218. 久田満(1987) ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題. 看護研究, 20,2-11. より引用

23) 堀野緑(1987) 達成動機の構成因子の分析一達成動機の概念の再検討ー. 教育心理学研究, 35,148-154.

24) 堀野緑,森和代(1991) 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因. 教育心理学研究, 39, 308-315.

25) 堀匡(2009) 大学生のソーシャルサポート提供に関連するソーシャルスキルの探索. 広島大学大学院教育学研究科紀要,第三部, 58,169-176.

26) House,J.S. (1981) Work stress and social support.Addison-Wesley.

27) 福岡欣治(2007) 臨床社会心理学. 坂本真士,端野義彦,安藤清志編, 第1版, 東京大学出版社, 東京. 100-122.

28) 船越正康(1987) 運動とパーソナリティ. 松田岩男,杉原隆編著, 『新版運動心理学入門』大修館書店, 東京, 203-228.

29) 市村操一,中川昭(2002) 体育と社会的スキル教育. 市村操一,阪田尚彦,賀川昌明,松田泰定編,『体育授業の心理学』, 大修館書店, 東京. 104-109.

30) 石黒正人(2008) 学生アスリートのライフスキルに関する研究ー場面によるスキル発揮の差異に着目してー. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科スポーツ科学先行コーチング科学研究領域修士論文

31) 磯貝浩久(2000) 運動行動に対する動機づけ理論とその文化規定. 健康支援, 1,2,15-26.

32) 板倉正弥(2005) ソーシャルサポートおよびウォーキング環境認知と身体活動, 運動の促進との関係. 体力科学, 54,219-228.

33) 伊藤豊彦(2004) 運動行動の始発動機と継続性. 調技孝治先生退官記念論文集刊行会編, 運動心理学の展開, 遊戯社, 148-162.

34) 菊池章夫 (1998). 思いやりを科学する. 川島書店

35) 木村論史,松浦佑規,首藤祐介 (2009) ソーシャルスキルの自己評価と他者からの評価に対する恐れが対人不安傾向に及ぼす影響 日本行動療法学会大会発表論文集, 35,412-413,

36) 岸順治,中込四朗(1989) 運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み. 体育学研究, 34,235-243.

37) 倉藤利早,田島誠,米谷正造,松枝秀二(2011) 選手の自主性と指導者のリーダーシップに対する認識の関係. 川崎医療福祉学会誌, 21,1,95-101.

38) Liang, J., Krause, N. M., & Bennett, J. M. (2001) Social exchange and well-being : Is giving better than receiving Psychology and Aging, 16, 511-523.. 堀 匡(2009) 大学生のソーシャルサポート提供に関連するソーシャルスキルの探索. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 58,169-176. より引用

39) Lowell, E, L. (1950) The effect of need for achievement on learning and speed of performance. Journal of Psychology. , 59-66.

40) 松野光範,来田宣幸,横山勝彦 (2010) 「ライフスキル教育」開発プロジェクトの実

践と課題－「硬式野球部」の取り組みを事例として－. 同志社スポーツ健康科学, 2,61-72.

41) 松田岩男,猪俣公宏,落合優,加賀秀夫,下山剛,杉原隆,藤田厚(1980) スポーツ選手の心理的特性に関する研究. 第 1 報, 第 2 報, 昭和 55 年度日本体育協会スポーツ科学研究報告.

42) 松田岩男,猪俣公宏,落合優,加賀秀夫,下山剛,杉原隆,藤田厚(1981) スポーツ選手の心理的特性に関する研究. 第 3 報, 昭和 56 年度日本体育協会スポーツ科学研究報告.

43) McCleland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., Lowell, E. L. (1953) The achievement motive. Appleton-Century-Crofts: New York.

44) McClleland, D. C. (1961). The achieving society. Van Nostrand Co , New York. 林保 (監訳) (1971) 達成動機-企業と経済発展に及ぼす影響 1. 産業能率短期大学出版部.

45) McClleland, D. C. (1987) Human Motivation. Cambridge University Press. Cambridge. 梅津祐良,薗部明史,横山哲夫(訳) (2006) モチベーション「達成・パワー・親和・回避」動機の理論と実際. 第 2 版, 生産性出版, 東京.

46) 宮本美沙子(1986) 達成動機の心理学. 金子書房,東京.

47) 水野治久,谷口弘一,福岡欣治,古宮昇 (編) (2007) カウンセリングとソーシャルサポート, ナカニシヤ出版, 113-121.

48) 向中野大作,川口鉄二,関岡康雄(2004) 陸上競技短距離走における中間疾走の指導法に関する研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, 5,79-86.

49) 村田泰伸,海野勇三(2008) 運動感覚能力を高める体育指導に関する研究一運動イメージの把握を促す言語活動一. 山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要, 25,273-281.

50) Murrey , H.A. (1938) Explorations in Personality・Oxford University Press; New York. 外林大作(訳) (1961) パーソナリティ. 誠信書房, 東京.

51) 永山貴洋,北村勝朗,斎藤茂(2005) 器械体操競技選手の学習方略に対して比喩的な指導言語が与える影響の定性的分析. 教育情報学研究, 3,67-76.

52) 中川靖彦,新井肇(2008) 「生きる力」を育てる中学校運動部活動の教育的機能に関する研究. 日本教育心理学会総会発表論文集, 50,546.

53) 中込四郎(2000) 運動とこころの健康「身体」から「こころ」へ. 杉原隆,船越正康,工藤孝幾,中込四郎編著, 『スポーツ心理学の世界』, 福村出版, 184-198.

54) 中村仁(2009) 運動部活動におけるソーシャルサポートが適応感と達成動機に与える影響. 東京学芸大学紀要,芸術・スポーツ科学系, 61,121-127.

55) 中島義明,安藤清志,子安増生,坂野雄二,繁桝算男,立花政夫,箱田裕司(2006) 心理学辞典, 第2刷, 622.

56) 奈須正裕(1995) 達成動機の理論-その現状と統合的理解の枠組み-. 宮本美沙子,奈須正裕(編), 達成動機の理論と展開, 金子書房,東京, 1-10.

57) 西田保,猪俣公宏(1981) スポーツにおける達成動機の因子分析的研究. 体育学研究, 26,(2),101-110.

58) 西田保(1987) 体育における学習意欲の尺度構成と類型化の検討. 総合保健体育科学, 10, 1,47-60.

59) 西田保(1980) 体育における学習意欲検査(AMPET)の標準化に関する研究一達成動機づけ論的アプローチー. 体育学研究, 34, (1),45-62.

60) Noblet, A., et al. (2003) Predictors of the strain experienced by professional Australian foot-ballers, J. Appl. Sport Psychol., 15,2,184-194.

61) 野崎真代(2014) 中学生・高校生・大学生の社会的スキルに及ぼすスポーツ活動経験の影響について. 桜門体育学研究, 49,1,1-8.

62) 大坊郁夫(2003) 社会的スキル・トレーニングの方法序説一適応的な対人関係の構築-. 対人社会心理学研究, 3, 1-8.

63) 落合良行,佐藤有耕(1995) 青年期における友人とのつきあい方の発達的変化教育. 心理学研究, 44,55-65.(1996)・岡田 努:現代青年の友人関係と自己像・友人像に関する考察教育. 心理学研究, 43, 354-363.

64) 岡浩一郎,竹中晃司,松尾直子 (1998) 大学生アスリートの日常・競技ストレッサー尺度の開発およびストレッサーの評価とメンタルヘルスの関係. 体育学研究, 43,(5・6), 245-259.

65) 大橋忠和(2010) 陸上競技の部活動指導者が行う運動技術の指導及びコミュニケーションの特質~冬期トレーニングの短距離・跳躍選手への指導における事例的研究. 陸上競技学会誌, 8,32-40.

66) 岡澤祥訓(1989) 身体活動と人格形成, 松井匡治,円田善英編, 『体育心理学』, 建

帛社, 175-195.

67) 大熊節子,西村秀樹(2003) スポーツ競技者のバーンアウトに関する社会学的一視座ー、 一流競技者と所属集団との関係性をめぐってー. 健康科学, 25,79-85.

68) 永松俊哉(2009) 青年期における運動・スポーツ活動とメンタルヘルスとの関係. 体力研究, 107,11-14.

69) Rabkin, J,G. & Struening, E.L. (1976) Life Events Stress, and Illness Science, 194,1013-1020. 久田満(1987) ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題. 看護研究, 20,2-11.より引用

70) 坂本真士・佐藤健二(2006) はじめての臨床心理社会学,ー自己と対人関係から読み解く臨床心理学ー. 第1版, 第2刷, 212-221, 有斐閣, 東京.

71) Sallis, J.F. et al. (1987) The development of scales to measure social support for diet and exercise behaviors, Prev. Med., Vol16, No.6, 825-836.

72) 佐藤正二,金山元春(2006) 中学校におけるソーシャルスキル教育の実践. 相川充, 佐藤正二(編). 実践!ソーシャルスキル教育中学校一対人関係能力を育てる授業の最前線一, 図書文化社, 8-21.

73) 志岐幸子,相馬一郎(2001) スポーツが子どもの心理的要因に与える影響について一一般の子どもとサッカー少年の比較検討から. ヒューマンサイエンスリサーチ, 10,95-108.

74) 島本好平,石井源信(2009) 体育授業におけるスポーツ経験がライフスキルの獲得に与える影響ー運動部所属の有無からの検討ー. スポーツ心理学研究, 36,127-136.

75) 島本好平,石井源信(2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発. 教育心理学研究, 54,211-221.

76) 菅宏規(2011) スポーツソーシャルサポート尺度の開発ー信頼性および妥当性の検討ー, スポーツ産業学研究, 21,2,169-177.

77) 杉原隆(2003) 運動指導の心理学,運動学習とモチベーションからの接近. 大修館書店, 東京. 50-86.

78) 高畑好秀(2001) その気にさせるコーチング術. 山海堂, 東京.

79) 高野進,植田恭史,渋谷聡,田中靖久(1998) 競技意欲とコーチング評価に関する研究, 東海大学体育学部紀要, 27 19-31

80) 竹村昭,丹羽邵昭,藤原瑞子,花田敬一(1963) 運動部経験者の性格特性についての研究. 体育学研究, 7,1,12.

81) 種ヶ嶋尚志,高橋正則,水落文夫(2005) 陸上競技選手のバーンアウトと完全主義及びソーシャルスキルとの関連, 陸上競技研究, 63,(4),54-58.

82) 丹羽邵昭,藤原瑞子,花田敬一,竹村昭(1963) 運動経験者の性格特性に影響する要因の分析的研究. 体育学研究, 7,1,13.

83) 土屋裕睦,中込四朗(1994) 大学運動選手におけるソーシャルサポートの構成要素とその機能. 筑波大学体育科学系紀要, 17,133-141.

84) 土屋裕睦(1995) ソーシャルサポートが大学運動選手の運動部活動に対する適応感形成に与える影響. 筑波大学体育科学系紀要, 18,75-83.

85) 土屋裕睦,中込四朗(1994) ソーシャルサポートのバーンアウト抑制効果の検討. スポーツ心理学研究, 21,23-31.

86) 土井聖陽(1982) 達成動機の二次元説一親和的達成動機と非親和的達成動機. 心理学研究, 52, 6,344-350.

87) 植田恭史(2006) コーチング研究[IV]一指導者の言葉. 東海大学紀要, 36,65-71.

88) 上野耕平,中込四郎(1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究, 体育学研究, 43,33-42,

89) 渡辺弥生,蒲田いずみ(1998) 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル,登校児と不登校児の比較. 静岡大学教育学部研究報告, 人文・社会科学篇, 49,337-351.

90) Winterbottom, M. R. (1953) The relation of childhood training in independence to achievement motivation. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.

91) Wootten Morgan(1994) バスケットボール勝利へのコーチング. 水谷豊,笈田欣治, 野老稔,中大路哲, 大修館書店, 東京.

92) 吉井四朗(1986) バスケットボール指導全書 1. 大修館, 東京, 2-105.

英文要約

Competition motivation and social skills of college students athletes, and associated with the support cognition from the coach

Summary

Yusuke Taguchi

【Background】

For college student athlete, decline of competition motivation it can be said a factor that must be avoided. Social skills and social support has been attracting attention, in recent years, in order to deal with the psychological problems of the athlete. Competitor able to relieve stress in competition situations by undergoing social support, more have been reported to be effective in suppressing the burnout. It has been reported that more susceptible to social support by further acquisition status of social skills. Therefore, in order to prevent a decline in the motivation of college students competitor, have their high social skills, it was considered to be said that it is important to obtain a social support system, such as empathic understanding and assistance from the coach. However, discussion of these related not yet been.

【Purpose】

This study, it was decided that social skills of college students athletes, and support for leaders to compare what kind are related to competition motivation.

【Means】

In October-November 2014, we conducted the anonymous self-administered surveys to students belonging to the movement of the A University Sports and Health Sciences, to give a number of valid responses of 595 people. The configuration of the questionnaire is a KISS-18, ASSS to measure the awareness of support from the leaders, achievement motivation scale to assess the motivation of athletes to evaluate the degree of social skills. For analysis, using SPSS ver.20.0

for Windows, t-test, correlation analysis was performed an analysis of variance.

【Result】

KISS-18, ASSS is significantly higher woman, it was a result that supports the previous study.

Regular than the non-regular is KISS-18, ASSS, is a high score in achievement motivation scale, it became a high score as rise further competition level result.

Result of the correlation analysis, the total score and all factors showed a positive correlation moderate.

【Conclusion】

Social skills and leadership support in college athletes, was shown to be significantly higher in women than men. In addition, the higher the competition level is high social skills, leadership support, competition motivation is high it became clear. In addition, persons social skills is high, and about those who are enjoying the leader support, it became clear that the competition motivation is high.

謝辞

本論文作成にあたり、論文指導教員である佐久間和彦教授には、多大なるご支援、ご指導をいただき、ここに深く感謝を申し上げます。また、日頃から助言、励ましをいただいた鈴木美奈子助教、上村明さん、大学院生の方々、その他ご支援いただいた多くの皆様に深く感謝を申し上げます。

論文審査ならびにご指導いただいた広沢正孝教授、島内憲夫教授に、厚く御礼申し上げます。

本研究の調査にあたり、アンケートにご協力いただいた順天堂大学の皆様に心から感謝の意を表します。

表

表 1　属性別の KISS-18 得点の比較

属性		N	コミュニケーション M	コミュニケーション SD	問題解決力 M	問題解決力 SD	トラブル処理 M	トラブル処理 SD	KISS-18合計 M	KISS-18合計 SD
性別	男性	466	25.8	3.64	18.6	2.64	22.0	3.39	66.5	8.84
	女性	129	27.2	3.42	19.5	2.19	23.3	2.61	70.0	7.34
学年	1年	146	26.3	3.23	18.7	2.33	22.3	3.16	67.3	7.82
	2年	175	26.3	3.72	18.8	2.64	22.5	3.21	67.5	8.74
	3年	161	26.0	3.97	19.0	2.75	22.3	3.45	67.3	9.05
	4年	113	25.8	3.49	18.7	2.52	22.1	3.33	66.6	8.52
種目	個人	314	25.9	3.79	18.8	2.64	22.2	3.36	66.9	9.03
	団体	281	26.3	3.45	18.8	2.50	22.5	3.18	67.6	8.22
役割	ﾚｷﾞｭﾗｰ	161	27.5	3.64	19.4	2.59	23.3	2.87	70.2	8.27
	非ﾚｷﾞｭﾗｰ	231	25.3	3.43	18.4	2.52	21.7	3.40	65.4	8.43
現在の競技ﾚﾍﾞﾙ	都道府県	127	24.7	3.87	18.0	2.76	21.1	3.55	63.7	9.25
	地方	323	26.1	3.48	18.7	2.44	22.2	3.19	67.1	8.22
	全国	129	27.4	3.29	19.7	2.41	23.7	2.60	70.8	7.53
	国際	7	28.7	3.30	21.2	1.95	24.6	2.99	74.4	7.59

***p. 001

表 2　属性別の ASSS 得点の比較

属性		N	親愛 M	親愛 SD	娯楽 M	娯楽 SD	自尊 M	自尊 SD	指導 M	指導 SD	ASSS合計 M	ASSS合計 SD
性別	男性	466	31.3	5.31	22.1	3.21	14.3	2.72	18.5	2.68	83.92	13.786
	女性	129	31.7	4.88	23.4	2.76	14.3	2.38	19.4	2.39	84.03	12.343
学年	1年	146	31.4	5.00	22.5	2.89	14.4	2.67	18.7	2.58	83.79	13.174
	2年	175	31.4	5.64	22.5	3.14	14.3	2.80	18.7	2.77	83.85	14.591
	3年	161	31.5	5.04	22.3	3.45	14.4	2.51	18.7	2.69	84.26	12.94
	4年	113	31.5	5.12	22.0	3.10	14.2	2.60	18.5	2.50	83.81	12.976
種目	個人	314	31.6	5.29	22.2	3.21	14.4	2.60	18.5	2.79	84.48	13.562
	団体	281	31.2	5.13	22.5	3.10	14.3	2.71	18.9	2.47	83.34	13.378
役割	ﾚｷﾞｭﾗｰ	161	32.8	5.28	23.2	3.12	14.9	2.68	19.7	2.46	87.06	13.601
	非ﾚｷﾞｭﾗｰ	231	30.5	5.00	21.8	3.16	14.0	2.66	18.1	2.48	81.72	13.055
現在の競技ﾚﾍﾞﾙ	都道府県	127	30.0	5.10	21.1	3.42	13.8	2.55	17.7	2.80	80.96	13.459
	地方	323	31.3	5.31	22.3	3.01	14.3	2.71	18.6	2.53	83.63	13.761
	全国	129	33.1	4.76	23.5	2.85	15.0	2.51	19.7	2.33	87.35	12.261
	国際	7	35.6	3.74	24.4	3.10	15.9	3.02	20.4	2.51	95	11.416

**p<. 01, ***p. 001

表 3　属性別の達成動機得点の比較

属性		N	自己向上 M	自己向上 SD	活動 M	活動 SD	イニシアティブ M	イニシアティブ SD	達成動機合計 M	達成動機合計 SD
性別	男性	466	45.3	5.54	40.4	4.49	26.2	3.67	111.8	12.75
	女性	129	45.4	5.01	40.6	4.31	26.7	3.17	112.7	11.53
学年	1年	146	45.2	5.77	40.4	4.99	26.2	3.46	111.8	13.25
	2年	175	45.0	5.07	40.3	4.16	26.3	3.59	111.6	12.06
	3年	161	45.8	5.57	40.7	4.53	26.4	3.53	112.9	12.46
	4年	113	45.2	5.32	40.3	4.03	26.1	3.77	111.6	12.30
種目	個人	314	45.5	5.56	40.7	4.55	26.3	3.66	112.5	12.67
	団体	281	45.1	5.27	40.1	4.31	26.2	3.48	111.4	12.29
役割	ﾚｷﾞｭﾗｰ	161	46.5	5.17 **	41.5	4.39 ***	27.0	3.40 **	114.9	11.95 ***
	非ﾚｷﾞｭﾗｰ	231	44.5	5.56	39.7	4.35	25.9	3.60	110.0	12.79
現在の競技ﾚﾍﾞﾙ	都道府県	127	44.1	5.67 ***	39.2	4.66 ***	25.2	3.66 ***	108.4	13.02 *** ***
	地方	323	45.3	5.42	40.5	4.39	26.4	3.60 *** ***	112.2	12.53
	全国	129	46.4	4.93	41.3	4.15	27.0	3.01 ***	114.7	11.06
	国際	7	51.3	3.20	45.0	2.45	28.7	4.27	125.0	4.87

**p<. 01, ***p. 001

表 4　KISS-18、ASSS および達成動機の相関

		KISS-18合計	ASSS合計	達成動機合計
1	KISS-18合計	—	0.63**	0.60**
2	ASSS合計	0.63**	—	0.72**
3	達成動機合計	0.60**	0.72**	—

**p<. 01

表 5　KISS-18 と達成動機の相関

	達成動機 自己向上	活動	イニシアティブ	合計
KISS-18				
コミュニケーション	0.49**	0.46**	0.60**	0.55**
問題解決力	0.56**	0.53**	0.63**	0.61**
トラブル処理	0.43**	0.42**	0.58**	0.50**
合計	0.53**	0.51**	0.66**	0.60**

**p<. 01

表 6　ASSS と達成動機の相関

	達成動機			
	自己向上	活動	イニシアティブ	合計
ASSS				
親愛	0.62**	0.64**	0.66**	0.68**
娯楽	0.48**	0.44**	0.64**	0.64**
自尊	0.63**	0.63**	0.64**	0.66**
指導	0.44**	0.43**	0.56**	0.56**
合計	0.66**	0.67**	0.67**	0.72**

**p<. 01

表 7　KISS-18 と ASSS の相関

	ASSS				
	親愛	娯楽	自尊	指導	合計
KISS-18					
コミュニケーション	0.55**	0.89**	0.45**	0.89**	0.54**
問題解決力	0.63**	0.81**	0.57**	0.80**	0.63**
トラブル処理	0.57**	0.85**	0.48**	0.78**	0.56**
合計	0.64**	0.93**	0.54**	0.91**	0.63**

**p<. 01

表 8　KISS-18 および ASSS の 3 群別の達成動機得点の比較

属性		N	達成動機 自己向上 M	自己向上 SD	活動 M	活動 SD	イニシアティブ M	イニシアティブ SD	合計 M	合計 SD
KISS-18										
	低群	171	41.4	4.70 **	37.6	3.66 **	23.3	2.31	102.3	9.27
	中群	236	45.6	5.10	40.6	4.46 *	26.3	3.20 *	112.6	11.90 *
	高群	188	48.4	4.17	42.7	3.60	28.9	2.76	120.0	9.45
ASSS										
	低群	197	41.4	4.39 *	37.1	3.65	23.7	2.93 *	102.2	10.10
	中群	187	44.6	4.65 *	39.8	3.42 **	25.8	2.88	110.2	9.73 **
	高群	211	49.6	3.49	44.1	2.85	29.1	2.58	122.8	7.22

*p<. 05, **p<. 01

調査のお願い

この調査は、大学生競技者のソーシャルスキルとソーシャルサポート及び競技意欲との関連を明らかにし、コーチングの現場で役立たせる上での基礎的な資料を得るために行われます。回答頂いた結果は全て統計的に処理され、個人が特定されることやプライバシーが侵害されることは一切ありません。また、この調査への参加は任意であり、同意した後でもいつでも辞退することができ、それにより不利益を被ることは一切ありません。　ご自身のお気持ちや経験について正直にお答えください。

ご協力いただけますよう、よろしくお願い致します。

順天堂大学スポーツ健康科学研究科
博士前期過程　　田口　雄助
指導教員　　佐久間　和彦

ご記入にあたってのお願い

1. 答えにくい質問、答えることのできない質問に対しては、答える必要はありません。
2. 相談はせず、ご自身の思った通りに答えてください。
3. 当てはまらない場合は記入されなくて結構です。
4. 全て終えましたら、記入漏れがないかもう一度見直してください。

質問1
まず下記の質問に答えてください。選択肢の項目については当てはまるもの1つを○で囲んでください。

学年:(　　)/ 年齢:(　　)/ 性別 :　1.男 ・ 2.女

クラブ・部活:(　　)

専門種目・ポジション: (　　)

駅伝メンバー入り経験: 1.有 ・ 2.無　※陸上競技部男女長距離の方

競技レベル: 1.地区大会 ・ 2.県大会 ・ 3.地方大会 ・ 4.全国大会 ・ 5.国際大会 ・ 6.その他

役割:1.レギュラー ・ 2.非レギュラー ・ 3.スタッフ

インターカレッジ出場経験:1.有 ・ 2.無

所属クラブの競技会での位置(例.関東大学リーグ○部等):(　　)

スタッフの方にお聞きします。
指導者は、週に何日練習に参加されていますか？　(　　)日

質問2
以下の文章を読んで、自分にどれだけ当てはまるか答えて下さい。

【選択肢】
5.いつもそうだ
4.たいていそうだ
3.どちらともいえない
2.たいていそうでない
1.いつもそうでない

		いつもそうでない				いつもそうだ
1	他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか？	1	2	3	4	5
2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか？	1	2	3	4	5
3	他人を助けることを、上手にやれますか？	1	2	3	4	5
4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか？	1	2	3	4	5
5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	1	2	3	4	5
6	まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか？	1	2	3	4	5
7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか？	1	2	3	4	5
8	気まずいことがあった相手と、上手に若いすることができますか？	1	2	3	4	5
9	仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか？	1	2	3	4	5
10	他人が話しているところに、気軽に参加できますか？	1	2	3	4	5
11	相手から非難されたときにも、それをうまく片づけることができますか？	1	2	3	4	5
12	仕事の上で、どこの問題があるかすぐに見つけることができますか？	1	2	3	4	5
13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか？	1	2	3	4	5
14	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか？	1	2	3	4	5
15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか？	1	2	3	4	5
16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか？	1	2	3	4	5
17	まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか？	1	2	3	4	5
18	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか？	1	2	3	4	5

質問3

あなたが競技生活を円滑に進めるにあたり、指導者との関わりや援助についてお聞きします。現在のあなたは以下に示した項目についてどの程度満足していますか？最も影響を受けていると思う指導者について答えて下さい。

【選択肢】
5.大変満足である
4.満足である
3.どちらでもない
2.不満である
1.大変不満である

		大変不満である				大変満足である
1	あなたの能力もしくは素質を重んじたり尊重してくれる。	1	2	3	4	5
2	雑談等をして楽しい時間を過ごす。	1	2	3	4	5
3	困ったときに助言してくれる。	1	2	3	4	5
4	個人的な悩みごとについて話し合える。	1	2	3	4	5
5	共通の趣味や関心を持っている。	1	2	3	4	5
6	技術面で分からないことを教えてくれる。	1	2	3	4	5
7	あなたの成功を心から願ってくれる。	1	2	3	4	5
8	一緒に出かけたりする。	1	2	3	4	5
9	あなたが今すべきことは何かを気付かせてくれる。	1	2	3	4	5
10	お互いの気持や感情を分かりあえる。	1	2	3	4	5
11	忙しいときに手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
12	本当に信頼できるアドバイスをしてくれる。	1	2	3	4	5
13	あなたの性格を理解してくれる。	1	2	3	4	5
14	気晴らしをしてくれる。	1	2	3	4	5
15	あなたの能力を最大限に引き出すために、練習計画などで相談に乗ってくれる。	1	2	3	4	5
16	うまくいかないとき、励ましてくれる。	1	2	3	4	5
17	心を落ち着かせてくれる。	1	2	3	4	5
18	なぜあなたがうまくいかないのかを理解し助けてくれる。	1	2	3	4	5
19	あなたのためを思って叱咤激励してくれる。	1	2	3	4	5
20	あなたのおかれた立場を理解し助けてくれる。	1	2	3	4	5
21	お互いに認め合い、高め合える。	1	2	3	4	5
22	病気などで休んだとき、連絡事項を知らせてくれる。	1	2	3	4	5
23	クラブ内での人間関係の悩みについて聞いてくれる。	1	2	3	4	5
24	あなたの成果を認めて評価してくれる。	1	2	3	4	5

質問4
あなたは以下の項目にどの程度当てはまりますか？その度合いを示す数値に○をつけてください。

【選択肢】
5.非常に当てはまる
4.まあまあ当てはまる
3.どちらでもない
2.あまり当てはまらない
1.全く当てはまらない

		全く当てはまらない				非常に当てはまる
1	クラブ活動をすることによって、自分が人間として向上していくことを実感したい。	1	2	3	4	5
2	クラブ活動を通じて、一生付き合っていけるような友人を作りたい。	1	2	3	4	5
3	人のプレーをよく見て,自分の役に立つことを吸収したい。	1	2	3	4	5
4	クラブ活動を通じて、運動面だけでなく自分のあらゆる面を向上させたい。	1	2	3	4	5
5	試合で勝つにはどうしたらよいか.についてよく考える。	1	2	3	4	5
6	クラブ活動を通じて学生時代にしかできないような良い友達を作っておきたい。	1	2	3	4	5
7	クラブ活動を通じて自分を向上させたい。	1	2	3	4	5
8	どうすれば今よりもっとすぐれたプレーができるかについていつも考えている。	1	2	3	4	5
9	自分のアイデア通りにクラブを推し進めていきたい。	1	2	3	4	5
10	私にとっては試合に勝つことよりも、クラブ活動で体験するさまざまなことを楽しむことのほうが大切である。	1	2	3	4	5
11	クラブ活動を通じていろいろな人と知り合いになりたい。	1	2	3	4	5
12	クラブ活動を通じて、社会に出てから役に立ちさまざまなことを経験したい。	1	2	3	4	5
13	クラブの他のメンバーのために練習計画を立ててあげたり決定を下したりしたい。	1	2	3	4	5
14	私は自分の責任で仕事を推進していくより、他の人の指示に従う方が好きだ。	1	2	3	4	5
15	私がこのクラブに入ったのはクラブ活動を通じてしかできないような深い関係の友人を作りたかったためである。	1	2	3	4	5
16	自分の判断と責任で活動を進めていきたい。	1	2	3	4	5
17	試合で勝つことは私にとって重要である。	1	2	3	4	5
18	いくら上手になるためといっても、あまりきつい練習にはついていけない。	1	2	3	4	5
19	クラブ活動を通じて困ったとき役立つ人脈を作りたい。	1	2	3	4	5
20	私は自分の責任で活動を推進していくより他の人の指示に従っていくほうが好きだ。	1	2	3	4	5
21	常に目標をもって、地味な練習にも頑張って取り組みたい。	1	2	3	4	5
22	私がクラブ活動をする一番の目的は、試合に勝つ喜びを味わうことである。	1	2	3	4	5
23	クラブで行事を行うとき、私は他の人に計画を立ててもらうより、自分でリードしたい。	1	2	3	4	5
24	私がこのクラブに入ったのは、競技を楽しむためであって友人を作るためではない。	1	2	3	4	5
25	技術を向上させるためなら、朝早く起きて練習するのもかまわない。	1	2	3	4	5
26	クラブ活動についてはただ単に身体を鍛えるだけでなく、それを通じて自分の内面を向上させるように心がけている。	1	2	3	4	5
27	試合に勝つためならどんなにつらいことでも耐え抜きたい。	1	2	3	4	5
28	他の誰かの指示を受けて活動を行うより、自分の判断で活動を行いたい。	1	2	3	4	5
29	クラブ活動を通じて将来役立つ様々な知識を身につけたい。	1	2	3	4	5
30	プレーに必要な技術は、強制されなくても自分から進んで勉強したい。	1	2	3	4	5

以上で終了となります。ご協力ありがとうございました。記入漏れがないか、再度ご確認ください。